

「あなたも行って同じようにしなさい」

レビ記
ルカによる福音書

第19章18節
第10章25節～37節

説教 村上修平牧師

「先生、何をしたら永遠の生命が受けられましょうか」。ある律法学者が主イエスを試みようとして言った。「律法にはなんと書いてあるか」と主イエスが質問を返すと、彼は自信をもって『心をつくし、精神をつくし、力をつくし、思いをつくして、主なるあなたの神を愛せよ』。また、『自分を愛するように、あなたの隣り人を愛せよ』とあります」と答えた。すると主イエスは、「あなたの答は正しい。そのとおり行ないなさい。そうすれば、いのちが得られる」とお答えになった。ところが彼は行うことの難しさ知っていたのでしょう、うろたえ自己弁護のために「では、わたしの隣り人とはだれのことですか」と尋ねた。(ルカによる福音書10章25～29節より)

そこで主イエスは、譬え話をされた。く寂しい山道で強盗に襲われ半殺しにされた人が、道端に倒れていた。そこを通りかかった祭司は、倒れた人を見ると向こう側を通って行った。同様に、レビ人も彼を見ると向こう側を通って行った。ところが、あるサマリア人は、彼を見て気の毒に思い、近づいて傷の手当てをし宿屋に連れて行き介抱した。そして、主イエスは彼に「この三人のうち、だれが強盗に襲われた人の隣り人になったと思うか」と尋ね、彼は「その人に慈悲深い行いをした人です」と答えた。すると、主イエスは「あなたも行って同じようにしなさい」と言われた。(30～37節)このサマリア人と同じように行うことが簡単でないことに私達も気づきます。例えば、いじめの現場に遭遇した時、助けることができるでしょうか。また、当時の事情を考えると話はもっと複雑で、倒れていた人はおそらくユダヤ人と思われ、サマリア人とは敵対関係にありました。私達は、敵対関係にある人を助けることができるでしょうか。

自分をサマリア人に当てはめて読むと、話は難しくなりますが、倒れた人に当てはめてみると分かることがあります。昔私が階段から転げ落ちた時のこと、多くの人が素通りする中、ある人に『大丈夫ですか?』と声をかけられ、隣人を見出した気がしました。私達は、時には失望し目の前が真っ暗になり倒れ込むことや、愛する人に見捨てられ、孤独の中で身動きできなくなることもあるかもしれません。しかし主はこの譬えを通して、そんな時に憐れみ深いサマ

リア人に出会えると教えて下さいます。

33節にサマリア人は「彼を見て気の毒に思い」とあります。これは単に、同情する、という意味でなく、その人を思うあまり自分の腸（はらわた）が痛むほどに憐れむという意味です。聖書の中では、ほとんど主イエスが主語となっています。例えば群衆が飼う者のいない羊のように弱り果てて倒れ込んでいるのをご覧になった時、また、やもめの一人息子の葬りの現場に出くわした時などに使われています。そして主イエスは、全てを捨てて迷子の1匹の羊を探し出し、愛する者を失い悲しむ母親のもとに一人息子を生き返らせてくださいました。主イエスはいつもこのように私達に出逢ってくださいます。私達が苦しんでいるのを知っているながら、そこを素通りできないお方なのです。主は、倒れた人を助け起こすために、希望をもって明るく前向きに生きられるようにするために来てくださった、憐れみ深いサマリア人なのです。

大阪教会でご奉仕した9年間、羊飼いという職にありながら、私もまた、迷子の1匹の羊のように感じられたこと、悲しみに打ちのめされたこと、説教が語れず牧師を続けられないと思ったことが何度もありましたが、振り返るとその度に、教会の方々の温かい言葉や祈りに支えられてきました。そして、気付いたことがあります。教会は憐れみ深いサマリア人の集団だということです。そして、教会はキリストの体であるので、教会の頭（かしら）なるキリストが憐れみに腸が痛む時、体なる教会も同じように痛むということです。憎しみのために祈れなかったあの兄弟のことも、祈れるように変えられるのです。なぜなら、頭なるキリストが腸を痛めているので、私達も憐れまない訳にはいかなくなるのです。サマリア人のこの憐れみが、私達主イエスを信じる全ての人に与えられると、聖書は約束します。「あなたも行って同じようにしなさい」と主は言われましたがく一人で行けとは言われません。く私が一緒に行くから、私と一緒にいきなさい、そしてく隣りには、あなたを祈り、支える信仰の仲間がいる、と教えて下さいます。神様の誠の憐れみをこの世の人に証するために、私達はここで出逢ったのだと信じます。

(記 説教要約奉仕者)